

CARE World

Vol. **1** ケア・インターナショナル・ジャパン
Newsletter
November 2005

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。



CARE World Vol. 1

Contents



page 3 事務局長からのメッセージ



page 4 事務局からの報告

page 5 ケア・インターナショナル ジャパン 2005年度事業計画

page 8 フィールド最前線
「グローバル・アクション・ウィーク2005に参加して」
サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵

page 10 Smile from Cambodia ~カンボジア発スマイル宅配便
サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵

page 11 私スタイルのCAREライフ
株式会社 生活の木/Tree of life (pvt) Ltd. 代表取締役社長 重永 忠
ロンドン大学LSE 国際関係学部 斉藤 百合



page 13 Our Supporters ~会員、寄付金協力者紹介

page 16 CARE Notice Board

ケア・インターナショナル ジャパン 新ニュースレター「CARE World」発行

2005年7月1日に、当財団は「(財) ケア・ジャパン」から「(財) ケア・インターナショナル ジャパン」へと団体名称を変更しました。これにともない、ニュースレターも新しい形で皆様にお届けすることになりました。

新ニュースレターのタイトルは、「CARE World」。世界の各地で支援活動に携わるCAREのスタッフ、CAREの事業に参加するコミュニティの人々、CAREの活動を支える世界中のサポーターの人々。すべての人がCAREを通してつながることで、その大きな力が活動を効果的な形で前へ進めています。

新ニュースレターでは、CAREのプロジェクト実施地域から、最新の活動状況や現地コミュニティの人々の声を多くお届けするとともに、国内でいろいろな形でCAREの活動をサポートしてくれる方々の活動などを紹介していきます。このニュースレターを開くと、皆が1つの「CARE World」でつながっているような気持ちになれる—そんな思いを込めた創刊です。

事務局長からのメッセージ

2005年7月に、ケア・ジャパンはケア・インターナショナル ジャパンとして新たなるスタートを切りました。今までの活動実績をベースに、世界最大級の国際協力NGO、CAREのメンバーとして、よりグローバルに活動を展開し、途上国の最も弱い立場にいる人々が、平和に、そして尊厳を持って生きていくことができるよう、プロフェッショナルな支援を行っていきます。

今までご支援いただきました皆様にお礼を申し上げますとともに、引き続きご協力いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

さて、本号は、ケア・インターナショナル ジャパンになって初めてのニュースレターです。CAREのビジョンである「誰もが人間らしく生きる平和な世界」は、CAREの国内・海外スタッフだけではなく、ドナーの皆様、インターンやボランティアの方々、そして国際協力関係者の力をお借りし初めて実現するものです。そこで、新ニュースレター「CARE World」では、途上国や国内の活動報告のみならず、このビジョンを達成するために協力してくださっているさまざまな方たちの「CAREへの想い」と「つながり」をご紹介します。ご期待ください。

さて、昨年末に発生しましたスマトラ沖津波から一年と経たない間に、アフリカの食糧危機、北米の南部や中米（エルサルバドルやグアテマラ）のハリケーン、そして10月のパキスタン地震と、災害が次々と貧しい人々を襲っています。ケア・インターナショナル ジャパンでは、パキスタン地震緊急募金にご協力いただきました方々に感謝申し上げますとともに、引き続きスマトラ沖津波の復興支援にご協力をお願い申し上げます。12月25日～29日には、スマトラ沖津波一周年イベントとして、写真展や講演会、チャリティ・パーティを開催する予定です。是非、お友達をお誘いあわせの上、ご参加くださいませ。お待ちしております。

(財) ケア・インターナショナル ジャパン
事務局長 野口 千歳

ケア・インターナショナル ジャパン 2005年度事業計画

事務局からの報告

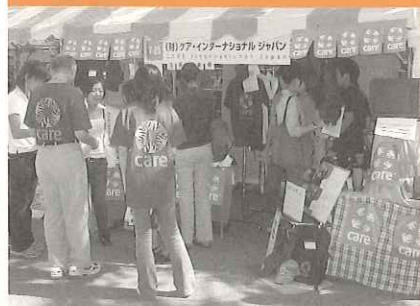
当財団監事の 原 禮之助氏が 国連工業開発機関 (UNIDO)の 親善大使に就任

2005年6月20日、オーストリアのウィーンにおいて、当財団監事の原 禮之助氏が国連工業開発機関 (UNIDO)*の親善大使に任命されました。

原氏は、セイコーインスツルメンツ(株) [現セイコーインスツル(株)]で代表取締役社長などを歴任するなど、日本の産業界において活躍するかたわら、UNIDOの産業開発プログラムに対する助言やレビューなどを通してUNIDOの活動にも貢献してきました。今後、原氏は、UNIDO親善大使として、講演や執筆活動などを通じ、日本の各界におけるUNIDOの活動に対する理解・支援を促進することが期待されています。

*開発途上国における工業開発を促進し産業協力を推進することを目的として、1967年に国連総会決議に基づき発足、1986年に専門機関として独立。事務局はオーストリアのウィーンにあり、現在、171カ国が加盟。

「グローバルフェスタ JAPAN2005」に 参加しました。



毎年恒例の国際協力NGOや国際機関などが集まって活動紹介を行うイベント「国際協力フェスティバル」は、今年は「グローバルフェスタ JAPAN2005」として2005年10月1日(土)、2日(日)に日比谷公園にて開催されました。当財団はこのイベントに毎年参加していますが、今回は新団体名称「ケア・インターナショナル ジャパン」としての初の参加となりました。ブースでは、CAREのロゴ入りグッズの販売のほか、パネルや資料を通して活動紹介を行い、CAREのことを知らなかった多くの方々に私たちの活動について説明するよい機会となりました。当日、お手伝いいただきましたボランティアの皆様、どうもありがとうございました。

スリランカ・フェス ティバルに参加しま した。

10月15日、16日の2日間にわたり、東京・代々木公園にてスリランカ・フェスティバルが開催されました。ケア・インターナショナル ジャパンは、日本でスリランカを支援するNGOのネットワーク組織「スリランカ復興開発NGOネットワーク」の一員として参加し、現在実施中の「プランテーション居住者の生活改善事業」およびスマトラ沖津波復興支援事業「学校における子どもの心のケアプロジェクト」について、写真とともに紹介しました。スリランカの伝統文化・芸能や食べ物を紹介するブースとは一味異なるコーナーではありましたが、国際協力に興味を持つ学生の方など、日本ではなかなか知られていないスリランカが抱える問題について熱心に耳を傾けていただきました。

ビジョン

ケア・インターナショナル ジャパンは、誰もが互いを尊重し、人間らしく生きる平和な世界を目指しています。

ミッション

ケア・インターナショナル ジャパンは、コミュニティの人々と共に貧困を生み出す根源の解決に取り組みます。

基本方針

ケア・インターナショナル ジャパンは、アジアにおいて最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援を行います。

近年、紛争や災害が増加する傾向が見られますが、最も弱い立場にいる人々(極度に貧しい、または社会的に隔離・迫害されているなど)が最も大きな被害を受ける構造は依然として残っています。そこで、今、国際社会に求められているのは、一時的、表面的な救援や支援活動ではなく、災害を予防する、または貧困や紛争の根源を解決し人々の自立を支援することです。

2005年 度の焦点

2004年9月の理事会で承認された長期戦略「グランドプラン」が軌道に乗り始めました。昨年度中に、新基本方針を「最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援」と決めました。本年度は、国内の教育機関や関連組織、現地事務所およびケア・インターナショナルのメンバーとの戦略的なパートナーシップをより強化し、海外における支援プロジェクトや国内における広報活動など、全ての活動に基本方針を反映していきます。

また、CAREが今年で設立60周年を迎えるにあたり、メンバーとしてのケア・インターナショナル ジャパンは、CAREのネットワークを最大限に活かし、世界的基準(グローバル・スタンダード)に沿った支援活動の展開により一層尽力していきます。

支援活動の 概要

現在ケア・インターナショナル ジャパンは、カンボジア、スリランカ、タイ、インドネシア、アフガニスタンの5カ国において支援プロジェクトを実施しています。カンボジアとスリランカでは、既存プロジェクトの質の向上に注力していく一方、発展型となる新規プロジェクトを積極的に展開します。昨年度開始したスリランカおよびインドネシアにおけるスマトラ沖津波復興支援事業に関しては、現地の復興状況に応じて、長期的な支援の可能性を模索していきます。

また、本年度は特に新規プロジェクトの開拓に力を入れます。インドネシ

ア、カンボジア、東ティモール、ネパール、ラオスを中心にプロジェクト地を訪問し、現地事務所との協議を重ね、事業の計画を練り、実施していきます。国際理解教育事業としては、レインボー事業が本年度に終了するため、新しいプロジェクトを開始するための準備を行います。

活動計画

1. 国際開発協力事業

①女子教育事業 サマキクマールII

対象地域: カンボジア
(ブレイベン州、ピムチョア地区)
実施期間: 2004年2月~2006年12月
(2年10カ月間)
主支援者: 国際協力機構 (JICA)

この事業は、2002年10月より1年間にわたって実施した事業、「サマキクマール」の経験を踏まえて計画されています。対象地区であるピムチョア地区では、貧困家庭における学費負担が困難であることや住民の女子教育に対する理解不足などの理由から、女子の就学率が非常に低い状況です。サマキクマールIIでは、この地区の女子がフォーマルおよびノンフォーマル教育にアクセスできるよう、家庭、コミュニティおよび学校の環境を改善することを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、学校とコミュニティにおいて女子生徒、親、教師、関係者などを対象とした意識向上活動を実施します。また、奨学制度や識字教室も継続して行います。さらに本年度は、住民によって計画された女子教育支援のためのアクションプラ



ンを実施する活動も行います。

②コミュニティのための人材育成事業 (女子教育奨学制度事業Ⅱ)

対象地域：カンボジア

(カンダール州、ルックダイク地区)

実施期間：2004年10月～2007年9月(3年間)

主支援者：ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京

この事業は、2002年～2004年に実施した女子教育奨学制度事業で中学課程を修了し、高校に進学した奨学生を対象としています。奨学生たちの高校課程修了を支援するとともに、彼女たちがコミュニティの発展に役立つ知識・技能を身につけることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、奨学生に対する寄宿費や補習授業費などの提供、奨学生、親、コミュニティの人々などに対するジェンダー意識向上ワークショップの実施、地区奨学制度運営委員会の運営管理能力向上のための活動などを行います。また本年度は、上記の活動に加えて、奨学生たちが習得した知識・技能をコミュニティの人々と共有し、社会に還元できるよう、ほかの生徒や地域の人々を対象として奨学生によるコミュニティ活動を実施します。

③移動教育事業

対象地域：タイ(ウボンラチャタニ県4郡)

実施期間：2003年1月～2005年12月(3年間)

主支援者：ケア フレンズ・東京、ケア フレンズ岡山

この事業では、都市と農村部の経済格差が広がるラオス国境に近い遠隔地において、教育環境が未整備な小中学校20校を図書や教材を載せた車が訪問し、教育活動を行っています。子どもが

中心となった参加型の総合的教育により、子どもたちが主体的に考え、表現し、行動する力を引き出し、自ら問題解決できる力を養うことを目標としています。

本年度は、各学校での総合的な学習活動を継続し、また、教師や青年ボランティアに対するスキル研修、青年ボランティアによる拠点地区での図書貸し出し活動なども引き続き行います。また、学校図書貸し出しシステムの導入やモデル学校における副教材の共同作成などの活動を新たに実施します。

④プランテーション居住者の生活改善事業

対象地域：スリランカ

(中央州およびウバ州にある15の紅茶農園)

実施期間：2003年5月～2006年5月(3年間)

主支援者：国際協力機構(JICA)

この事業は、プロジェクト対象地の紅茶農園居住者を対象としています。居住者の多くは、19世紀のイギリス植民地時代に労働力としてインドから連れてこられたタミル人の子孫で、社会的・経済的に地域社会から隔離され、劣悪な生活環境での生活を余儀なくされています。この事業では、居住者たちの社会生活の改善を目標としています。

本年度は、住民組織である参加型チームに対するトレーニングなどの実施や農園外部の社会・行政サービス提供団体との連携強化を継続します。また、参加型チームによる参加型チーム以外のプロジェクト対象者に対する普及活動、設立されたインフォメーション・センターの有効活用、居住者自身により計画されたミニプロジェクトの実施などを新たに実施します。

⑤スマトラ沖津波復興支援 学校における子どもの心のケア プロジェクト

対象地域：スリランカ

(南部州、ハンバントタ県、アンバラントタおよびティッサマハラマ)

実施期間：2005年4月～2007年3月(2年間)

支援者：学校、協賛企業、一般寄付

2004年12月に発生したスマトラ沖地震の津波被害により、スリランカでは3万人以上の命が奪われました。被災者の中には、家族や友人を失った人も多くいます。インフラなどのハード面での復興だけでなく、心のケアなどソフト面での支援も重要です。この事業では、被災した子どもたちの心の傷が癒され、心身ともに健全な生活を送ることができるようになることを目標としています。

昨年度は、子どもたちの心理的・精神的ニーズについて調査を行いました。また、親や教師などから構成される「学校支援グループ」のメンバーに対して、子どもたちの症状やその対応策についての意識向上ワークショップなどを実施しました。本年度は、上記の活動を継続するとともに、各学校において子どもたちのニーズに沿った参加型活動計画を策定し、実施していきます。

⑥スマトラ沖津波復興支援 国内避難民のための水と衛生 プロジェクト

対象地域：インドネシア

(アチェ州、バンダ・アチェおよびアチェ・ブサル)

実施期間：2005年3月～12月

(10カ月間)

支援者：協賛企業、一般寄付

スマトラ沖地震の津波被害により、

インドネシアでは約53万人が家を失うなどで国内避難民となり、仮設住宅や避難所での生活を強いられています。CAREが実施した被災コミュニティのニーズ調査によると、水と衛生の問題が深刻であることが確認されました。この事業は、仮設住宅や避難所で生活する国内避難民が、下痢などの病気に悩まされずに健康な生活を送ることができることを目標としています。

昨年度は、タンカーによる避難所への水の運搬や排泄物処理車トラックによる仮設トイレに貯まった排泄物の除去を行いました。また、看板やコミュニティ・チームを通して、限られた水の効率的な使用や排泄施設の清潔な利用についてなどの知識の普及を実施しました。本年度も、これらの活動を継続して行います。

⑦コミュニティ運営による初等教育 プロジェクト

対象地域：アフガニスタン

(中央部および南東部9州の農村地域)

実施期間：2004年7月～2006年5月(2年間)

主支援者：ケア フレンズ岡山

アフガニスタンでは、タリバン政権時代には女子は教育を受けることができず、いまだにその教育システムは世界で最も劣悪であるといわれています。この事業は、教師、コミュニティ、地方教育行政機関のキャパシティを高め、コミュニティにより運営される学校での活動を通して、遠隔地のコミュニティの生徒が質の高い初等教育を受けられるようにすることを目標としています。

昨年度は、主に教師に対する現職研修、再教育研修、教材開発研修を実施しました。また、村教育委員会のメ

ンバーに対して、女子が教育を受ける権利、コミュニティによる学校運営、政府との連携などについての研修を行いました。本年度は、これらの活動を継続するとともに、引き続き生徒(約60%は女子)に対する教材の提供も行います。

2. 国際理解教育事業

レインボー事業

対象地域：カンボジア(カンダール州、ルックダイク地区)、日本国内

実施期間：2000年7月～2006年6月(6年間)

支援者：(財)大阪コミュニティ財団、ECC、Think the Earth、(株)東食、一般寄付など

この事業では、カンボジア対象地区の教育環境改善(貧困家庭の教育費負担の軽減、学習意欲を高める授業作り、美術の教師育成)およびカンボジア・日本両国の相互理解および国際交流の促進をはかることを目標としています。

最終年度となる本年度は、例年通り、日本の小中学校からカンボジアの子どもたちに対する文房具や作品などの寄贈、カンボジアにおける絵のワークショップの開催などを行います。国内においては、カンボジアの子どもたちの作品を日本の子どもたちに贈呈するとともに、作品の展示会を実施します。

また、6年間の事業の総括として、カンボジアにおいて、教師、運営委員会、村人、生徒に対するインタビューやアンケートなどを実施し、これまでの活動の評価を行います。国内においては、ケア・カンボジアの担当スタッフの来日による講演・展示会の開催や国際理解教育の推進を目的とした各学校への巡回展示会の実施を計画しています。

3. 新事業開拓

1) 現在、実施しているスリランカにおける「プランテーション居住者の生活改善事業(p.6の④を参照)」に続く事業として、「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト」を申請中です。

2) カンボジア、ラオス、東ティモール、インドネシア、ネパールの中から複数の事業を選定し、現地訪問や現地事務所との協議を通して、2～3つの新規事業の実施を目指します。また、並行して、新ドナーの開拓にも努めます。

フィールド 最前線

グローバル・ アクション・ ウィーク2005に 参加して

サマキクマールII
プロジェクト・マネージャー
遠藤 恵



イベントにて、人身売買の問題を取り上げてロールプレイを行う少女

女子教育事業サマキクマールIIは、経済的・社会的に厳しい状況にある女子が、生きる力となる教育を受けることができるよう、親、コミュニティの人々、地方行政機関と協力して様々な活動を行っています。主な活動は、小学校高学年に在籍する女子への奨学制度、村での識字教室運営、さらに親やコミュニティの女子教育への理解を高めるための意識向上ワークショップです。

これらの活動のほかに、サマキクマールにおいて重要とみなして参加しているイベントがいくつかあります。今日はその一つであるグローバル・アクション・ウィーク (Global Action Week) を紹介したいと思います。

グローバル・アクション・ウィークは、教育のためのグローバルキャンペーン委員会 (Global Campaign for Education) によって運営されている年次世界イベントです。この行事は世界中の誰もが教育を受けることができるよう、子どもたちが政治的な力を持った大人に対して訴えます。今年2005年のグローバル・アクション・ウィークは、世界中の政府が、国連の貧困撲滅に向けたミレニアム開発目標を達成するために積極的な行動を起こすよう求めることを目的として行われました。

カンボジアでは、CAREを含む21のカンボジアのNGOおよび国際NGOがこのイベントに参加しました。アクション・ウィークの4月23日～27日の間、カンボジアの各地において多くの子どもたちがさまざまな方法で政治家や行政関係者に「大切な友だちに教育を (Send my Friend to School)」と訴えました。サマキクマールは、人身売買や性的搾取から女子を守るためのプロジェクトを行っているワールド・エジュケーション (アメリカに本部を置くNGO) と協力し、4月26日にプレイベン州でグローバル・アクション・ウィーク2005を実施しました。

女子、地域の人々、教育省関係者を含む行政関係者など総計542名が集まりました。サマキクマールの活動地域からは、21名の識字教室に通う女子が参加し、このうちの2名が地区の知事と教育省職員の前で友人の状況を訴

え、そして社会・経済的に厳しい状況にいるすべての子どもたちがみな教育を受けることができるよう強く求めました。彼女たちの発表の一部を紹介しましょう。

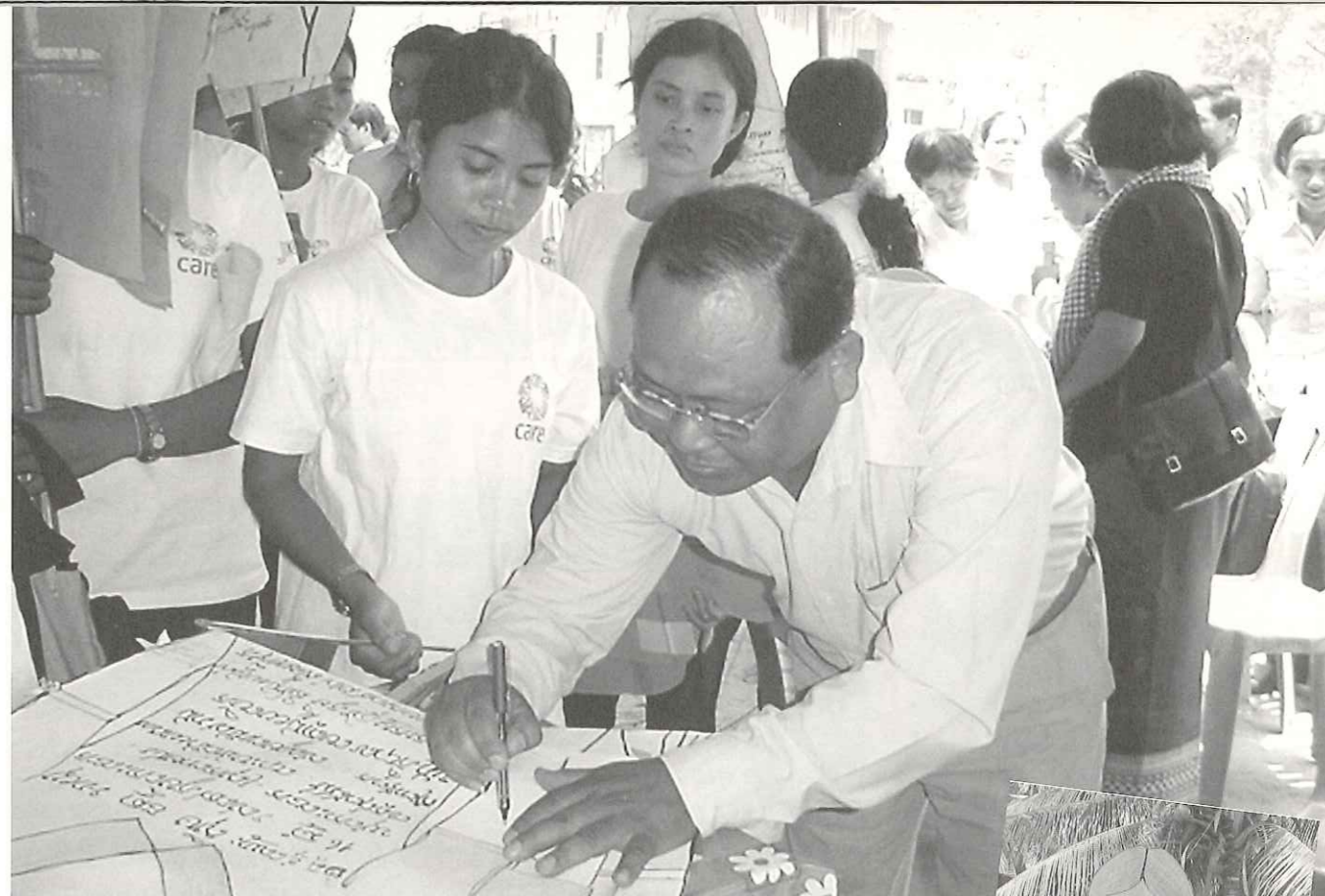
「みなさん、こんにちは。今日は私の友だちのスレイソーのことを知ってもらおうと思い、ここに来ました。知事、教育省の方にぜひ私たちの置かれている状況を理解して、行動を起こしてもらいたいと思います。私がこれから読む手紙は私の友人スレイソーが書いたものです。よろしくお願いします。」

「私は19歳です。私には6人の兄妹がいます。お兄さんは21歳です。兄は小学4年生のときに退学し、スイカ農園で働きはじめました。今はプノンペン市の建設現場で日雇い労働者として働いています。私は兄妹のなかで2番目です。家の手伝いをしなければならず、小学3年のときに退学しました。妹たちは学校に通っています。」

私の家族は米麺を作って生計を立てています。米を作る土地はありますが、そこで収穫される米だけでは麺を作るにも、家族が食べていくにも十分でないため、知り合いから米を買わなければなりません。ですから麺を売って得ることができる利益はとてわずかです。私の家の屋根は長い間、壊れたままです。修理をするお金もありません。ですから、雨期になるとどこかに身を寄せなければなりません。

私の両親は、私にプノンペン市で仕事を探させるために近隣から35ドル借りました。私はプノンペン市で仕事を探しましたが、読み書きができないという理由でだれも雇ってくれませんでした。本当にかかりました。読み書きができないということが、くやくして仕方ありませんでした。もし、ちゃんと教育を受けていればきっとほかの人と同じように仕事を見つけることができたと思います。

そんなときCAREのサマキクマールプロジェクトが識字教室を始めると聞きました。勉強する機会がもてると知ってとてもうれしかったです。今、識字教室に通っています。家庭環境は大変ですが、一生懸命勉強しています。麺を売って、それから識字教室に行きます。仕事をしながら勉強していますが、教室に行くことができる日は遅れたことはありません。



イラストの切り抜きにサインする教育省関係者

私の両親は酔うと私や兄妹に暴力をふるいます。ほとんど毎日酔っぱらい、私に酒をつがせます。そして、私に識字教室に行くな、読み書きなんてなんの役にも立たないと怒鳴ります。こういう状況になると私は識字教室に行きたくても行くことができません。識字教室に行かなくても両親は大声で村中に聞こえるぐらいの声でのしり続けます。私は自分の環境が恥ずかしく、逃げ出したい気持ちでいっぱい、薬を飲んで死のうと思ったことがあります。でも、友だちや先生が励まし、元気づけてくれたので、もう死ぬことは考えなくなりました。

今はとにかく識字教室で一生懸命勉強しています。私は、教室に通う前と今とは違います。今、私は以前よりも麺を売ることができるようになり、新しいアイデアもあります。そして、読み書きもできます。識字教室が終了したらまた仕事を探すつもりです。

みなさんにお願ひがあります。村にいる私のような女子たちに技術を学ぶ機会を作ってください。そうすれば将来、自分たちで仕事を始めることができます。どうぞお願いします。」

以上、私の友だちのスレイソーから

の手紙でした。知事の方、教育省の方、どうぞスレイソーのような女の子たちを助けてください。すべての子どもたちが教育を受けることができるようにしてください。お聞きいただきありがとうございます」

女子たちの発表の後、知事、教育省関係者から彼女たちの訴えに対する意見が述べられましたが、残念ながら彼女たちの願いを積極的に汲み取るスピーチはなされませんでした。彼女たちの心からの訴えが具体的な成果を出すためには、政治家や行政関係者たちに意見を述べるだけでなく、より戦略的な計画をもって働きかける必要があります。これはカンボジア各地で行われたイベントすべてに共通する課題です。来年のアクション・ウィークに向けて、NGOはさらに具体的な対策を考えなければなりません。大きな課題は残されていますが、こうした小さなイベントの積み重ねが彼女たちを力づけると信じています。

サマキクマールIIが開始してすでに1年半が過ぎ、活動の成果が少しずつ現れてきました。スレイソーを含む識字教室受講者の68%が9カ月のコースを終え、去る7月に教育省から修了証



学校に通えない友だちについて訴えるために作られたイラストの切り抜き

書を受け取りました。修了者の62%の女子が現在ポスト識字教室にて学業を継続しています。そこでは保健衛生、母子保健、感染予防など生活に直接関連する情報を網羅した教材を利用し、女子たちの識字能力向上に努めています。将来、母となる女子たちの保健知識向上は次の世代の子どもたちへのよりよい生活を約束します。

スレイソーのような状況にいる女子たちへの教育機会が約束され、また、これまでの活動による成果が持続可能なものとなるには、女子、親、コミュニティ、自治体そして地方教育局等との確かなつながりが大切です。このつながりを形成するためにサマキクマールIIは、コミュニティの人々からなる女子教育支援グループと連携して活動を運営しています。



カンボジア発スマイル宅配便

Smile from Cambodia

サマキ クマールII—子どもたちの結束

サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵

サマキ クマールIIの対象地域は、ベトナム国境近くのココン川沿いに位置します。毎年雨期になるとココン川氾濫による洪水に見舞われ、人々のすでに不安定な暮らしがさらに脆弱な状況に追いやられます。今年も雨期の始まりが遅く、早魃の被害も報告されています。地域の人々の、特に母親の教育レベルは低く、またコミュニティ全体の女子教育に対する

理解は限られています。女子は一家の重要な働き手としてみなされ、経済・社会・環境的に非常に厳しい状況にある家庭では、女子は家庭内や農場での労働はもちろん、農閑期には都市へ出稼ぎに行き、家族を支えなくてはなりません。

サマキクマールIIでは、このような状況にいる女子が、生きる力となる教育を受けることができるよう、小学

校高学年女子への奨学制度、識字教室の運営、そして親や地域の人々を対象に女子教育に対する意識向上ワークショップを行っています。また、これらの活動から得られる成果が持続可能なものとなるよう、女子教育支援の枠組み作りを地方行政体などと協力して構築しています。

19歳で小学5年生のホル・ソヴァンは、サマキ クマールの奨学生として選ばれました。生活は非常に不安定ですが、彼女には教育を続けたいという強い意志があるからです。ソヴァンの家は8人家族で、ソヴァンは母親、姉3人、弟3人と住んでいます。父親の家庭内暴力がひどくなったことが原因で、2年前にソヴァンの両親は離婚しました。それ以来、ソヴァンの生活はさらに厳しくなり、その日その日を生きるのが精一杯の状態です。

ソヴァンの家族は米や野菜を育てる土地を持っていないので、生計を立てていくためには薪と野原で炒め物に利用できる草を集めて売るしかありません。早朝から夕方まで、ソヴァンは家族と一緒に市場で売った薪と草を探します。休まず一日中働いても、日に2000リエル(0.5ドル)しか得られず、家族のための食料を買うにはとても足りません。

このようにソヴァンの家族は非常に貧しいのですが、

母親はソヴァンと彼女の兄弟を学校へ通わせ、高等教育を修了させたいと考えています。なぜなら、ソヴァンの母親は、サマキ クマールの意識向上ワークショップに参加して、教育は子どもたちが自信をつけるのに役立つことを知ったからです。ソヴァンもまた、奨学金を受け、教育の重要性を伝えるサマキクマールのワークショップに参加してからは、学校を欠席することがほとんどなくなり、ソヴァンは家の手伝いもしなければなりません。ソヴァンは毎日休まず学校へ行くよう努力しています。

サマキ クマールが始まってから、多くの貧しい家庭の女子たちが教育を受ける機会を得て、親たちはコミュニティで教育について話すようになったと、ソヴァンの母親は言います。小学2年生で学校をやめたソヴァンの姉の一人は、現在はソヴァンから読み書きを習っています。彼女は自分のために学習することを楽しんでます。

サマキ クマールは、カンボジアのプレイベン州でソヴァンのような女子たち約1400人を支援しています。

私スタイルのCAREライフ

スリランカへの特別な想い、そして顔の見える支援活動

株式会社 生活の木 / Tree of life(pvt)Ltd. 代表取締役社長 重永 忠



スリランカという国と私どもとは特別な関係にあります。日本におきまして私たちはスリランカの大切な恵みを頂戴しています。そのスリランカが大変なことになるに至りました。2004年12月26日に押し寄せたスマトラ沖地震による津波です。私どもはスリランカにおきましてリゾートホテルやアーユルヴェーダ施設を営んでおりました。その経営もようやく軌道に乗り始めましたところに、この残酷なる自然災害を受け、経営上大きなダメージとなるに違いないという危惧を抱き、その後数日間考え込んでおりました。幸いにも弊社ホテルには被害がなかったのですが、被災地に対して何か自分たちのできることで支援していきたいということを実感し始めました。現地へ乗り込ん

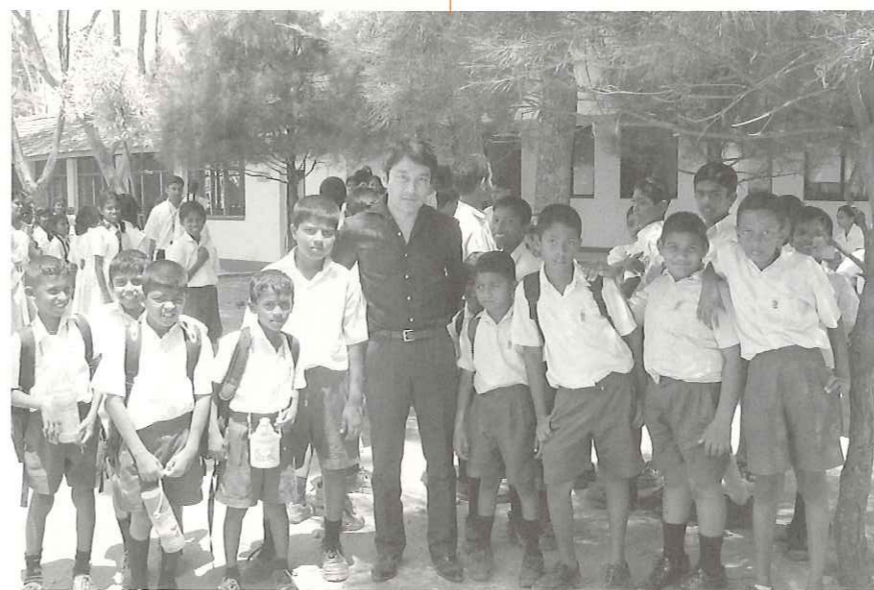
でやみくもに活動しても、素人の我々では活動の邪魔になるだけのことでも知っておりまして、むやみやたらに金銭的な支援を行っても、その用途については自分たちには伝わってこないであろうし、いったいどうしたらよいものか悩んでおりました。

年明け、あるご縁から現ケア・インターナショナル ジャパン常務理事・事務局長の野口千歳さんにお会いいたしました。野口さんは災害当日、現地ゴールにて津波を体験し、直後に緊急支援活動をされました。その野口さんより、現地でご実行されました緊急支援活動のことをお聞きし、ケア・インターナショナル ジャパン様が「人としての尊厳をしっかりと考えられた人道的支援」を行っていただけますことに共感しました。私どもとしましては実際の活動面での協力をケア・インターナショナル ジャパン様に託していきたいという結論に至り、早速その活動資金に充てるべく義援金の募集活動を開始しました。

日本での義援金の募集につきましては、日本国内60店舗の生活の木の直営店舗にて募金窓口を設置し、さらに支援の輪を広げることが目的としたチャリティーコンサート「かん



支援先に提供した仮設住宅の一部と被災者の住民



支援先の学校生徒と

ばれ!スリランカ」を実施いたしました。チャリティーコンサートにつきましては、昨年11月にスリランカ・コロンボで開催された芸術文化アワードにおいて日本の親善役を務められた、歌手の沢田知可子さんご夫妻を中心に、お心ある日本の音楽家の皆様から無償で音楽を通じて力を貸していただきました。そしてこれらの収益をケア・インターナショナル ジャパン様のスリランカ復興支援活動資金としてお役立ていただきたく寄付をさせていただきました。

もうひとつ、スリランカにおいては、直接目に見える形の支援を、スリランカの私どもの現地法人Tree of lifeと共に実行できないかと考えました。その結果、私たちは「仮設住宅の建設」「学校の教育復興支援」そして「アーユルヴェーダ病院の経営復興支援」の3つを「直接的支援」として自ら実行することにしました。そのための資金的支援につきましては、生活の木の社員、そして私の個人的な社外プレーの皆様に対してお声がけをし、この3つの支援に充てることのできる心もった義援金が集まりました。さらに、スリランカ・コロンボの音楽ホールにて現地でのチャリティーコンサートを私ども主催で企画・運営をし、日本でのチャリティーコンサート「かんばれ!スリランカ」にご協力いただきました沢田知可子さんご夫妻にご出演いただきました。お陰さまで現地においても多くの支援の輪を広げ、多くの支援資金を得ることができました。ここでの収益は、既に仮設住宅の建設資金として役立てさせていただいております。

このような形で年初より支援活動をしてまいりましたが、私自身も今年3月、4月と直接、被災地を訪問し、その結果を自ら確認してまいりました。直接の支援をさせていただいた所も訪れ、被災者の方たちと直に触れ合うことにより、逆に彼らより教えていただいたことは、前向きに、元気に、そして明るく頑張っているまさに「生きる力」でした。ケア・インターナショナル ジャパン様が主催した津波写真展において場所の提供や広報の面などで協力しましたのも、悲壮感の漂った写真ではなく、前向きに元気に生きようといったことが感じられる写真でありますことから賛同しました。

私たちのスリランカに対してのこの特別な関係と想いは、ケア・インターナショナル ジャパン様と共にこれからも続いていきます。

将来の夢を確信した一夏

ロンドン大学LSE 国際関係学部 齊藤 百合

CAREでのボランティアについて考えるきっかけとなった、African Diaryという本を紹介してくれたボーイフレンドと



生まれはパリ、育ちはアルジェリア、スペイン、タイ、そして現在はロンドンの大学に通っている、家族とパスポートだけが日本人な私。海外生活を送り、外国人の友だちと付き合っていくうちに自然と世界情勢や国際関係に興味を持つようになりました。8才の頃から国連の「ファン」で、将来の夢は獣医か世界平和に貢献する人でした。高校生の頃からアムネスティ・インターナショナルのイベントの計画・実行を手伝ったり、模擬国連の事務総長を務めたり、反イラク戦争のデモに参加したりと、とても活発的に国際的な活動をしてきました。そして今は、化学が苦手なことから獣医の夢を諦め、ロンドン大学LSEで国際関係学を専攻し、外交政策、国際機関、国際法、中東問題などを勉強しています。

イギリスの大学生は、皆2年生の夏休みは働くため、大学ではインターンシップ・フェアや資料が豊富にあり、私、はりきって夏休みの就職活動を始めたのです。しかし、講演をしに来る企業、そして就職活動のメルマガが入ってくる情報は全て金融関連。回りの友だちはみんなそのような仕事を希望し、どの企業が一番給料が高いかなどを熱心に話し合った。そんな中で私は一人だけもっと国際的な、直接世界に貢献するような仕事を望んでいた。

「やっぱり私は夢が大きすぎるのかな」と思い始めていた頃、私みたいに世界を舞台に活躍することに憧れている彼がイギリス人の著名人ビル・ブライソンの“African Diary”を貸してくれた。これはCARE International UKのケアでの事業をユーモラスに紹介している本です。バス停でこの本にのめり込み、バスを逃したこともあるほど夢中になって読みました。CAREは、タイにいる頃、古着やおもちゃを寄付したこともあり、大学の文献にもよく出ていたので基本的なことは知っていましたが、この本を読み、事業の持続性をいかに重視し、「人」を大切にしている団体かということを実感しました。CAREの単なる支援を与えるだけでなく、

地域の人々と一緒にコミュニティの開拓を図るといった立場に感動しました。

この本に鼓舞され、CARE International UKのボランティア制度について調べたがCARE International UKではボランティアの機会が少ないのか、「ロンドン事務局でボランティアする機会はあるわけではありません」や「ボランティアは必要となりましたら募集しますので、そちらから願書は送らないでください」となんと冷たい雰囲気。しかし、諦めきれずにウェブサイトを見ているうちに日本にもCAREがあることが判明。すぐさまボランティアの機会があるか問い合わせたら、とても友好的な返事が来た。CAREで働けるのなら、慣れない東京でも頑張れると思い、今夏は2年ぶりに母国の日本に戻ることを決意した。

実際にCARE International Japanに来て、「世界のCARE」が日本ではこれほどまで知られていないということに驚きました。しかし、このため、ウェブサイトの翻訳や事務作業を通してNGOのマーケティング戦略や広報活動の大切さなど、大学ではあまり焦点が当



オーストラリア人の親友とロンドン・ライフを満喫!



帰国後、スタッフから贈られたTシャツを早速着て、大学で撮った写真を送ってくれました

てられない分野でいろいろと学ぶことができました。有給のインターンをしている友だちにはボランティアをしていることをよく指摘されますが、私はCAREでとても貴重な、他では決して得られない経験を得たと思っています。

将来の夢を聞かれると、「子どもの頃は世界を改善したいと思っていたけど、非現実的ですよね」と答えてしまいがちだったが、今夏、CARE International Japanで働いてみて励まされた気がする。世界を変えることはできないかもしれないけれど、一人ひとりの人生を改善することはできる。そして、CAREはそれを実現している。



当財団事務局にて。毎日、その英語力を生かして、本当に多くの部分でお手伝いいただきました

Our Supporters

会員、寄付金協力者紹介

(2005年5月1日～10月31日)
(敬称略・50音順)

みなさまの温かいご支援に事務局スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

●個人賛助会員 (新規)

佐藤 健治
柴田 昌春
笠井 浩史
Laurent Sauveur

●個人準賛助会員 (新規)

石川 正久

●法人会員(新規) (株) VSN

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
泉 聡司
市川 直子
伊東 直
大町 竜頭
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
中谷 庄八
成瀬 富美子
畑中 悦子
嶋山 由紀夫
松崎 史夫
三浦 みどり
水谷 素彦
安則 和子

●パッケージ会員 (継続)

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
泉 聡司
市川 直子
伊東 直
大町 竜頭
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
中谷 庄八
成瀬 富美子
畑中 悦子
嶋山 由紀夫
松崎 史夫
三浦 みどり
水谷 素彦
安則 和子

●法人会員(継続)

財団法人国際協力推進協会
有限会社西片企画

●個人賛助会員 (継続)

赤坂 彰夫・秀子
秋山 剛康
渥美 伊都子

●個人賛助会員 (継続)

安齊 徹男
池田 有宏
石戸谷 由子
井上 恵美子
井上 勝六
岩井 昭
岩田 和己
岩本 妙子
上杉 治
上村 尚子
小川 朝子
奥山 幸猛
小倉 知巳
小野 英一郎
柿澤 弘治
柿原 浩太
数原 孝憲
加嶋 昭男
金田 平夫
鴨下 博
川口 順子
北川 曉子
黒川 千万喜
黒河内 康
黒田 則子
小塚 実千代
後藤 健
佐渡 弘・ユリ子
澤田 乃輔
柴岡 珠理
澁沢 厚美
渋谷 奈穂子
菅原 次朗
菅原 明夫
鈴木 生子
添田 幸恭
染谷 恵司
高島 直一
高瀬 覚照
高津 一正
高橋 澄江
田中 厚彦
塚原 国男
遠山 正俊
中島 清美
中野 紀美代
永田 俊一
新関 千鶴
菲澤 嘉雄
野口 千歳
野口 晏男
服部 純市
嶋山 安子

●個人準賛助会員 (継続)

日比 みづ江
降旗 健人
本田 享道
増井 潔
御巫 望子
峯岸 和永
宮戸 慎一
三輪 長正
諸井 政昭
柳井 良子
矢吹 真人
山中 康平・博子
山本 卓弘
横山 克美
吉田 紀子
吉田 正美
吉原 幸一郎
吉満 博
吉村 精仁
和久本 芳彦
(財)博慈会

●個人準賛助会員 (継続)

伊藤 英夫
畷部 和男
内田 三美
角 充弘
呉服 雅子
鹿野 好子
白木 良和
田上 富子
中尾 あぐり
中村 政憲
四宮 涼子

●個人準賛助会員 (継続)

伊藤 英夫
畷部 和男
内田 三美
角 充弘
呉服 雅子
鹿野 好子
白木 良和
田上 富子
中尾 あぐり
中村 政憲
四宮 涼子

●寄付金協力者

芦原 俊介
天野 森
石井 栄子
稲川 素子
犬飼 星斗
犬飼 裕子
浮貝 鈴子
角 充弘
笠井 浩史
加藤 尊明
鴨下 博
河本 茂夫
久保 五利
酒井 文男
[[財]日本ボールルームダンス連盟]

●個人準賛助会員 (継続)

澁沢 厚美
遠山 正俊
丹羽 勇夫
ほりこし のぶひろ
諸井 政昭
やまだ まさる
山中 康平・博子
山本 卓弘
やまもと ひろや
横田 笑
Matt Archibald

●個人準賛助会員 (継続)

アジアカンファド会
医療法人清仁会
西シミス病棟
ういっちいず ぶろじゅくと
(特活)環境アリーナ研究機構
ケア フレンズ岡山
ケア フレンズ札幌
ケア フレンズ・東京
ケア・サポーターズクラブ大分
(株)スペースポート
ダイヤ精密株式会社
日本デジタルコミュニケーションズ株式会社
(株)ファミリーフロントコーポレーション
ECC総本部

●個人準賛助会員 (継続)

青山 絢子
青山 歌子
秋谷 幸一
秋谷 真美
秋谷 征子
天野 武雄
新井 美代子
石田 紀男
石戸谷 由子
石原 由記子・明子
泉山 高清
伊藤 英夫
今井 隆吉
今村 達男
岩切 慎子
岩崎 祥一
岩本 妙子
植田 東子

●個人準賛助会員 (継続)

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 泰み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川鷹 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
神原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
澁沢 厚美
庄司 滋明

●個人準賛助会員 (継続)

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 泰み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川鷹 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
神原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
澁沢 厚美
庄司 滋明

●個人準賛助会員 (継続)

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 泰み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川鷹 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
神原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
澁沢 厚美
庄司 滋明

●個人準賛助会員 (継続)

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 泰み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川鷹 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
神原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
澁沢 厚美
庄司 滋明

●個人準賛助会員 (継続)

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 泰み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川鷹 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
神原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
澁沢 厚美
庄司 滋明

白石 露
白髭 真理子
菅沼 みゆき
菅原 規仁
鈴木 政夫
鈴木 靖郎
鈴木 由美子
墨岡 宏
諏訪 孝
関口 義久
平 和代
倫子
高嶋 正明
高瀬 覚照
高橋 キヌ
高橋 良郎
高島 美人
高比良 美一
武田 恭子
田中 宏
谷口 七郎
塚原 国男
堤 功一
角田 法子
鶴岡 禮子
寺岡 紀美子
遠山 晶子
遠山 正俊
戸田 よし
富山 卓司
中島 智恵子
中島 保
長嶋 久子
永田 俊一
永山 治
中村 光子
生貝 恵子
奈良 耕作
西谷 宏之
西山 キミエ
西山 瞳
野口 千歳
野口 晏男
乗富 俊二
野中 敏子
野村 健太郎
橋口 日出夫
嶋山 安子
林 厚
原 禮之助
東 未子
樋口 晃子
平林 薫
廣島 総司
藤川 俊昭
布施 あおい
古屋 浩
北條 真弓
本田 享道

- 本田 早苗 松井 おさむ 松田 茂之 松葉 芳子 三島 弘子 三井 達彦 瀧島 フミ 宮川 武夫 宮杉 明義 村上 悦雄 村瀬 礼子 森脇 道子 諸井 政昭 師田 志津恵 矢沢 歌子 柳下 明美 矢吹 真人 山岸 美智子 山崎 勝之 山田 恭子 山田 那津子 山中 康平・博子 山本 克子 山本 卓弘 横田 秀子 横田 笑 横山 富美子 吉田 正美 吉田 美佐江 吉原 幸一郎 吉満 博 吉村 精仁 米田 清郎・順子 領毛 幸子 和久本 芳彦 渡辺 省三 渡辺 奈み子 渡会 武嗣 金岡紙工 都築鋼産株式会社 富田税理事務所 マネジメントプレーン ●スマトラ沖地震 による津波復興 募金協力者 芦原 俊介 有田 尚樹 伊澤 博子 岩本 依子 大島 らう 大曾根 義子 岡野 玲子 亀田 洋一 北村 恵美 國木 明雄 古関 勇助 小間喜 昭子 榊原 五子 染谷 政男 高橋 克己 田川 幾子 田沢 百合 土山 眞一 寺脇 かつ子 内藤 伸広 新山 満男 丹羽 孝司 花澤 勝也 広段 隆 福生 隆・地伽子 北條 成子 本田 敏夫 増田 三千八 松岡 義人 山田 那津子 山中 千賀子 山田 由美子 芳村 恵以子 アメリカンスクール イン ジャパン ギブソン スクール オブイングリッシュ ケア フレンズ岡山 大本信徒連合会 (株)東京ドーム (特活)パブリックリ ソースセンター 連西寺 (株)DNA E C C総本部 GEキャピタルリーシ ング (株) VSN名古屋営 業所 ●パキスタン地震 緊急募金協力者 相島 洋子 青木 幹多 青柳 萬亀子 青山 絢子 青山 歌子 秋谷 征子 秋山 光子 秋山 剛康 皆 礼子 浅尾 新一郎 朝岡 みよ 大曾根 義子 浅野 孝子 浅野 晃一郎 浅見 晃一郎 芦原 俊介 東田 尚子 阿部 靖彦 天野 森 天野 ユキエ 荒井 弘男 新井田 かつ子 荒川 玉江 有野 博貴 有藤 久 生稲 精子 池 淳一 池上 哲二 池田 良江 石井 幹子 石井 栄子 石戸谷 由子 石原 一子 石原 清宏 石渡 咲子 泉 聡司 泉 忠 泉山 高清 伊勢 キヨ子 井田 三智子 板垣 章 一柳 邦男 伊藤 篤子 伊藤 由里子 伊藤 直 伊藤 ルミ 稲川 素子 稲田 謙三 稲森 禮子 井上 恭子 井上 徹夫 今里 悦子 今沢 新 今村 昭子 今村 達男 岩井 昭 岩切 慎子 岩田 貴美子 上杉 治 上田 美江子 上野 愛 上野 幹雄 上野 俊子 植之原 道行 上林 實 上原 綾子 上村 辰夫 魚本 秀 内ヶ島 敏博 内田 英子 内田 三美 内田 よしえ 海野 光雄 梅山 ミト子 江崎 清子 枝 順子 海老原 孝治 江良 充久 遠藤 都志恵 大内 八郎 大岡 純雄 大河原 良雄 大木 誠 大島 寿美子 大須賀 敬子 太田 清蔵 大塚 福恵 大塚 美代子 大庭 光義 大貫 努 大橋 和江 大橋 津満子 大羽 きよ 大浜 幸子 大町 竜頭 大道 富士雄 大山 ひろみ 岡崎 二三 尾形 孝 岡庭 明彦 岡本 豊三 岡本 太一 小川 冴み 小川 健 小川 朝子 小川 ひとみ 沖田 晋吾 尾崎 あや子 小沢 太郎 小沢 憲 小田 泰子 鬼塚 邦雄 小野 祈恵 小野田 章司 小野塚 喜久代 小早川 由紀子 織原 正樹 甲斐 道子 海瀬 祥子 香川 雄治 柿澤 弘治 柿沼 實 角 充弘 影山 光太郎 掛川 厚 掛井 浩史 笠松 真理子 数原 孝憲 片桐 加寿子 片倉 邦雄 桂 弘 桂 秀子 桂川 洋子 加藤 みゆき 加藤 大智 加藤 堯 門田 ヨシ子 香取 昭 金井 洋子 金子 淑恵 金子 邦雄 金坂 政忠 金城 弘明 金田 平夫 鎌田 節子 上坂 千代 神澤 清 神野 羊子 上林 市朗 亀井 信子 亀島 未喜 龍山 幸恵 唐木 知直 河井 充幸 河合 正修 川浦 幸光 河上 麻紀 川上 厚紀 川口 まゆみ 川島 久典 川島 周平 川島 満 川城 正信 川瀬 キヌ子 河中 三重子 川西 衣子 川西 小八郎 川端 啓子 川俣 一郎 川村 千鶴子 河本 泰行 庚 珍化 神田 幸子 神田 成子 木内 やい 菊池 正男 菊地 恵美子 岸尾 修 岸本 桂子 木田 満 北岡 さよ子 北口 正己 北林 照助 北原 政澄 木下 是雄 木下 和子 木村 欣二 木村 トシ子 木村 博 木村 正博 久後 彦夫 草川 益美 串田 吟 楠元 優 久野 孝子 栗原 晴美 小井土 喜代子 工 信之 瀧原 優香 高鹿 栄助 古賀 秀彦 五木田 邦子 小倉 婦美子 小平 靖 小平 陽子 後藤 博子 後藤 健 小貫 茜 小畑 祐梯 小林 静子 小林 憑四郎 小林 立 小林 正樹 小林 英一 小林 晋 小林 正 大和 喜代美 小林 百合子 小林 代志江 小堀 宗武 是枝 隆定 近藤 トシ子 齋藤 安津士 齋藤 千代美 齋藤 俊子 齋藤 正子 佐伯 佳代 佐伯 継一郎 酒井 恵美 坂井 加寿美 坂井 忠雄 坂上 弘 阪上 正昭 榊原 真美子 坂本 陽介 笹川 幸子 佐々木 友子・貴士 佐々木 美晴 佐渡 弘・ユリ子 佐藤 安正 佐藤 かおる 佐藤 賢司 佐藤 千恵子 佐藤 昭博 佐藤 健治 佐藤 幸子 佐藤 妙子 澤田 乃輔 塩田 尚子 塩田 賢子 鹿野 好子 穴倉 敏雄・ユキ子 下ノ本 佐知子 美平 進 篠田 理恵 柴田 繁睦 柴田 淑子 柴田 美保子 嶋 由昭 島田 富恵 島田 宮子 清水 ヒサ子 下平 光子 春藤 聡子 庄司 慈明 進谷 健 新保 敦子 新屋 英雄 進来 富子 末廣 清明 菅沼 みゆき 菅谷 弘 杉野 律子 杉村 朗 杉本 庄吉 杉山 昌子 鈴木 治雄 鈴木 政夫 須田 收 須田 雄子 角 章子 住田 織枝 諏訪 孝 関 孝之 瀬能 孝敏 千 宗室 添田 和子 曾田 泰子 染谷 恵司 平 和代 高馬 起夫 高木 重知 高木 富美子 高島 直一 高嶋 正昭 高嶋 倫子 高瀬 覚照 高野 隆司 高橋 キヌ 高橋 智司 高橋 良郎 高橋 律子 高橋 裕子 高畠 美人 高藤 久也 高松 妙子 高本 善四郎 多賀谷 靖子 滝谷 賢介 滝山田 美智子 竹内 兼雄 竹内 智之 武内 正充 竹腰 郁代 田代 かよ子 多田 喜久子 多田 俊子 太刀掛 侑子 立花 悦子 田中 英夫 田中 裕美 谷口 七郎 多昌 万裕 田村 泰雄 田村 希美 辻 節子 土田 ヨウ子 土田 聡子 津村 憲 鶴園 禮子 寺岡 紀美子 寺田 正治 富樫 幸 戸井田 文枝 ドウトレイ 昌子 ドウトレイ ジャック 徳田 とみ子 徳永 孝司 戸田 よし子 富岡 慧 内藤 重信 内藤 頼誼 内藤 康夫 中尾 あぐり 長尾 武子 長岡 興樹 中川 久美子 永川 春光 中澤 道明 中島 保 中島 千代子 中島 洋子 長嶋 久子 永末 美代 中園 尚孝 永田 俊一 中西 淳子 中野 喜久子 中野 紀美代 中野 光男 永野 京子 中平 立 中平 一幸 中村 亨 中村 敦子 永山 治 永吉 恵美子 夏目 常男 夏目 豊子 鍋田 忠男 成川 豊樹 成瀬 義明 縄 美雪 新倉 康夫 新沢 美彦 新関 千鶴 新美 功 新村 和子 西田 邦夫 西谷 宏之 西村 君江 西村 淳子 西山 敬三 西山 キミエ 西山 瞳 丹羽 伸子 根本 百合子 野口 東 野田 晏男 野田 幸裕 野中 稜市 野畑 宏吉 野畑 由起子 野村 健太郎 橋本 郁子 羽田 美彦 畠山 恵美子 羽木 徳子 濱 堯夫 浜岡 正一 早川 清美 早坂 淳子 林 淳子 林 ヒロ子 原 禮之助 半澤 孝磨 日置 晋時 東 末子 樋口 晃子 樋口 隆則 久富 龍夫 平塚 美智子 平林 薫 平松 高志・加代 平山 治子 広岡 欣之助 廣川 恒夫 広島 桂一 廣瀬 匠子 布川 由紀子 富貴田 タツ子 福味 英子 福田 和美 藤 ちえ 藤澤 葉子 藤永 康 藤本 たみ子 藤保 惟通 藤山 信博 布施 博子 布施 あおい 古屋 英樹 坊内 誠治 北條 真弓 坊農 えつ 堀江 達 堀岡 洋子 本間 則恵 本宮 喜久枝 眞 伸子 益田 敦子 増山 恵子 町山 素子 松浦 葉子 松尾 公平 松川 祐子 松下 一弘 松下 千奈美 松田 茂之 松田 光枝 松富 真佐留 松葉 芳子 松本 修三 丸山 淳子 三浦 圭祐 三浦 華恵 三浦 みどり 三木 一宏 御木本 澄子 水谷 泰子 水野 チヨノ 水野 達彦 三ツ木 麗子 満島 フミ 三原 恵子 三村 愛子 宮川 慎二 宮川 武夫 宮澤 悦次 三好 達 村上 眞樹 村上 悦雄 村上 セイ 村上 守 村永 孝子 村松 寅三郎 村山 良一 森 真理子 森 時子 森 定雄 森 泰造 森 拓三 森 棟子 森 理恵 森下 泰夫 森下 吉太郎 山口 静子 森田 史子 森田 千恵子 森村 洋二 森本 接夫 森脇 道子 諸井 政昭 諸岡 孝昭 八木 勝恵 安江 克子 安田 光男 矢内 潤子 柳田 順達 柳下 明美 数木 謙一 矢吹 真人 山内 希洲 山内 朱実・実華 山内 重信 山内 久子 山口 義雄 山崎 勝之 山 いよ子 山崎 博子 山下 益子 山田 清一 山田 みつゑ 山田 ルイ 山田 美江子 山中 順雅 山中 康平・博子 山根 淳子 山本 美和子 山本 重喜 山本 伸一 山本 桃代 湯川 夏樹 幸 暁美 横田 笑 横田 謙 横田 英夫 横山 敏二 横山 敦 横山 賢 横山 幸子 横山 恒雄 横山 美穂子 吉川 晋平 吉田 保介 吉田 正美 吉野 文雄 吉原 幸一郎 吉満 博 吉村 精仁 吉村 有子 米田 清邦・順子 米田 清 米原 喜孝 米山 克 四宮 涼子 領毛 幸子 隣 佳子 若松 千恵 和久本 芳彦 和田 寛 渡辺 奈み子 渡辺 一正 渡辺 省三 渡辺 寿子 渡辺 康隆 渡部 怜子 Mr&Mrs B.RAMCHANDANI (株)イースクエア 金岡紙工 (株)岐東庭園 久留日荒木郵便局 ケア・サポーターズ クラブ大分 ケア フレンズ岡山 サロンエステート ジュネス宝塚寮 新居浜アライアン ス・キリスト教会 聖心会 サービスセン ター・ヘルプライン 日本海綿業株式会社 金沢支店 福祉協宮崎北部支 部一同 普誓寺 文京白山五郵便局 職員一同 マネジメントプレーン 都築鋼産株式会社 (株)ムサン 武蔵村山市立第十 小学校

Photo Credits front & back cover : ©Harsha De Silva

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.1
2005年11月30日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

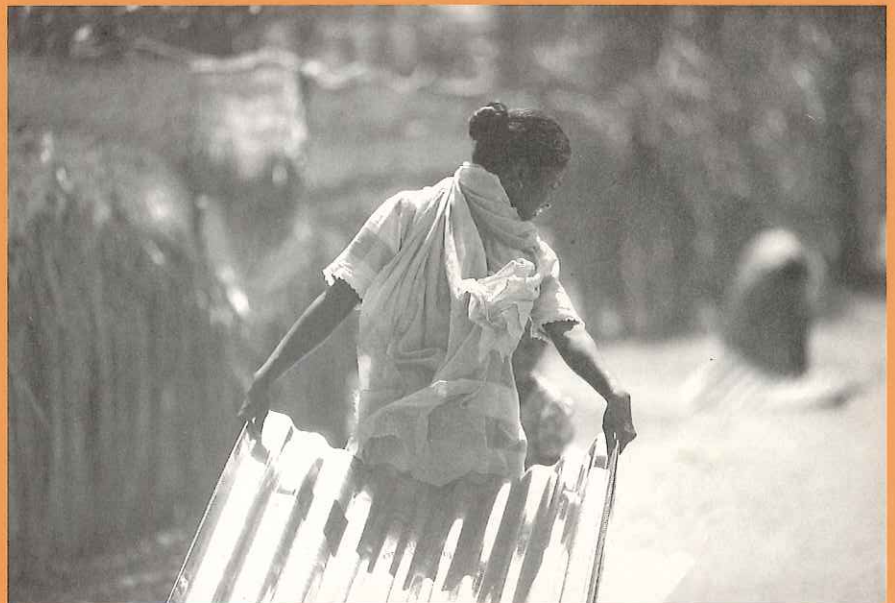
スマトラ沖地震による 津波1周年イベント開催

日時：2005年12月25日(日)～29日(木)

場所：美術会館 ギャラリー青羅 (東京都中央区銀座)

昨年12月26日にスマトラ沖にて発生した地震による津波で多くの人々が亡くなり、また被害を受けました。CAREは、津波発生直後から緊急支援を開始、現在は復興に向けた事業を継続して行っています。津波発生から1年経った今年の12月末に、当財団では1周年イベントを開催します。この1年間の

CAREの支援活動や現在の現地の状況についてご報告させていただくとともに、さまざまな企画を通して事務局とCAREの活動をサポートしてくださる皆様との交流の場になればと思います。詳細は、当財団ホームページにて掲載予定です。多くの皆様からのご参加を心よりお待ちしております。



* 皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World誌面上にてご紹介させていただきます。また、「ケアの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！